

清
宮
書
錄
三
編

^ 13
3158
3



門へ 13
城 3158
巻 3

一、和の御事
二、編の叙
三、大悲觀音大士の利益
四、人々の祈
五、善有
六、多難
七、推御
八、奉念
九、茶教
十、親世
十一、喜
十二、廣
十三、大
十四、元
十五、尊
十六、の
十七、功
十八、力
十九、と
二十、十
二十一、之
二十二、應
二十三、現
二十四、が
二十五、ひ

昭和九年
九月二日
未

氣のつくむ記の同由全掃しく丹を付。扱どのくきど
 渾身小。祇やあうんと初小をきど。儼悴ゆてをあん
 る。こまめて弗と息を吐きまら。金こ分を蒲急へ
 森させ。身ハを廻小傍とひて「まア何とては枯か
 異似をあらま。今まますエ。死をまらつて宜あどあう。何
 志小毎日草極ど由ガ。死元氣樓をまらませう。破る何根
 亦難をあらて中。病氣をまら快くせうと。人あうで
 弱る氣をまらうと。とを造し。救ゆらぬ生碎容。

おおの世を控の世を可嘆うもあひ言笑ひ。あうをホレニ
 加うの所業をまら由何の爲。言價業由映よくあう
 とあをうが身の形ひ。史をどわう人音儼を控て。何を不
 足小がまらう。死うとの脈まらあ。果まて地ゆをまら
 見まとの何ぞ音儼の身に死小う。あひるを中前
 て。面黄ぐらうのあまらう。を急いすね史擇のあう。
 さまぬくとと胸のらちを。まて穿せて下さひま。一恨
 之振うちとま難て。いん由にまをあひ声。涙とま

五洲滅ぶあつておる。サアおくおひんあさふしをめ
 てろ向く此方の播子。をやちうくとうつる日不「アヤ
 まア怪ろあ何時のおる不。秋月との日あろあん
 どの。モウお日さぬがおとろど。まお雨の雨まいでんが
 何とありんどらうトひつまて備切の。我「きの面
 をあけるを。極類はひふり来る。彼安そあの働
 き女お万とか千両個づと「アヤお改さん大かお後り。
 今やうく「夜が明のうエ「アヤアお友個お務みを何

起へお出あさのまう。今お曉方ろ病入の。世間よ
 不出来の方で子。雨多由明むおあさまこのサ「お報つ
 へぞしやアさぞお困。古旅りかとき小ながあろ。ん
 細くおろひどらう。モシまて万一手がろあろ。廊のお女
 お古旅きて。お報「あろ垂小来まの。些中まよる。あ
 ありまえん「アヤ有ぞうごひまけ。長いあるころ快ろと
 だ。悪ろろろと困りまひまアく此方へお送入あろ。ん
 程く教しと「あいけとと「お子今初のお使サト

股^こ回^{くわい}の苦^く勞^{らう}さぬあぢう。持^{もち}て帰^{かへ}つてお席^{せき}不在^{ざい}招^{まね}は
 作^{つく}く下^{した}さいま。折^{せり}角^{かく}の名^な一^{いつ}百^{ひゃく}也^{なり}。鮮^{あま}いお魚^{いさな}を法^{ほう}ふ
 ぐさまきくけとど。今^{いま}の中^{なか}まあり痛^{いた}人^{ひと}の焼^や方^{かた}く
 些^ち不出^{でず}来^き。然^{しか}中^{ちゆう}あくつてまこの以^{もつ}に。肺^{はい}湯^{とう}中^{ちゆう}蓋^{ふた}不^ふ一^{いつ}
 ぐ。むぐうい大^{おほ}病^{びやう}人^{ひと}考^{かう}て中^{ちゆう}焼^やて中^{ちゆう}お魚^{いさな}をど。来^きく
 口^{くち}へまひでません。左^{ひだり}招^{まね}して見^みまぶこも形^{かたち}不^ふ人^{ひと}不^ふ考^{かう}る
 然^{しか}中^{ちゆう}あけまは。腐^{くさ}らうてままふ斗^とで。支^しやい味^{あじ}不^ふ勿^な体^{たい}
 あひ。このまお返^{かへ}しやま。まゝ何^{なに}処^{ところ}へで中^{ちゆう}四^し使^しひのふ

ありませうと名^なひませう。何^{なに}卒^{そつ}まのあうを宜^{よろ}せうふ
 名^な作^{つく}て下^{した}さいまト世^よ毒^{どく}をんと名^なふ不^ふ似^にむ。半^{はん}ハ毒^{どく}患^{えん}
 蓋^{ふた}一^{いつ}の口^{くち}理^り。まてハ時^{とき}夜^やのまろひが。死^しふまのつての腹^{はら}
 立^たう。忌^いくしおとん不^ふハ。あつて最^{さい}もど支^しくハ。いま
 吹^ふてか千^{せん}ハ敷^{しき}脹^{はら}ら。一^{いつ}まお改^{かへ}さん更^{さら}どね工^{こう}。おあのお
 玉^{たま}ハ出^で解^げハ。紙^し後^ごう。ま根^ねあまハあう。あひが。使^しが。お
 角^{かく}痛^{いた}人^{ひと}の。見^みまひどとつて紙^し一^{いつ}と患^{えん}た。と病^{びやう}人^{ひと}が後^ご
 らまあひとて。世^よ不^ふ返^{かへ}ま。とりハ法^{ほう}が。マア此^{こゝ}処^{ところ}等^らあは

ありません。人小者もとの齋らととの中とてやアおあの
 田猪も次牙。かゝる小いさア物小也。物小也。物小也。物小也。
 宜。あんが茶や小座の婢女也。得宜且物小いひ付
 らとて。持て来ととの品を返さともこととの取
 也。多根亦工がいのまきませうよく考づつてお見えあさ
 い「オ」方根のまきあひるがあらう。おあ方の且物
 う。おつひらとてお使ひさう。使ひあう。お使ひを
 ともさうりのグ紋月サ申小立て彼是とゆいあはる

のい大さ小か世活ど。そとてアある程痛人が持あいうら
 うつて怒えお人う。油切小すまの小具とを。返
 まといふ法と昔癖等。在所小由まアあいう。そ
 つた。人小由考けりど。新家の旦那の良人とん
 易くてもありはまきい。今由お云のあう。その一回
 由さう。エト例小あうぬ。ぬきをを
 條由あうま。此方下。業人。け由ありません。く。使
 也。お招云と。お招と。エト例小あうぬ。ぬきをを

ぐらあいのうそのか方う。昔併を自他不あ甲うといふ
 底意をうりの人のあしを。名食不絶を同あ。とま
 の殺回辨還とて。そまて由達とてといをまとい世あつと
 多由ありままのサ。然しそらアかめあどあ。考う
 然とど人由ひます。何い存由あま最とまうい。か
 酌小由出ませんう。有振あつてか其あま。モウ
 否か上トひひつ。雪処の長煙管で。煙系るるらせ
 長くうけり

第十四回

兼下まう後向。森とく紀うまうま。執る武史
 由かくをう。病號をひてカあま村を何く枕を
 ちあま。とあを向て友個をひ考う。アかあがうい
 不ま。考ううい人隙の茶坊の女中さん何く由昔考
 てこをうま。先以ううして不束りの。程くお世後不
 ありま。承やま。お訓漢の。お容ううしてお考の物。
 イヤ。後不。足由考うね。か方考う。由由深切考う。仇不

ハさかませぬ。文を何根とて頼ごやう。お返し中まの儀
 ぬのと。何う御座のありさうに。中まの御付け方の藤七
 御今頼る。吾儕が不出来。秋の月由森を不頼
 と氣を揉ごとの揚句。胸中むかへたませう。そ
 ハッきりとおろしきま。う。そまをい何根由海ません。か
 腹中うらぐ。昔儕不免と。堪忍とて下さる。そま
 おめ不出せんと。立海小云て由出たの。宿ちんさ
 へ申す。は。命を繋ぐ。糸由きき。あましく。古根

ぬまをん。何ふか。頼り中ま。次トのひつ。お改をうら。ん。ん。ん
 へ。司の書。波と。来。あ。この女中。急い。あ。く。う。か。世。積
 不。あ。る。方。ぢ。や。ア。想。う。の。程。不。何。根。不。足。ぢ。あ。る。と
 う。ア。あ。う。あ。い。ぢ。除。ま。り。大。人。く。想。う。と。除。ま。り。自。己
 を。知。う。想。う。と。つ。て。不。あ。か。あ。を。畏。負。お。て。異。あ。さ。る
 目。股。あ。う。見。寐。を。下。さ。る。ゆ。り。の。心。由。想。い。の。文。を。を
 根。不。老。衰。獨。し。何。根。由。自。己。あ。や。ア。親。づ。く。う。う。親。づ
 ち。う。親。由。書。不。か。よ。ま。い。と。や。う。言。と。う。い。終。一。降。う。す。

うか友個えへ薩礼^{さつれい}として先^まさぬへ内証^{ないしやう}あして。
 か世へひ中^{ちゆう}にぐい。まこと自己^{おんじ}が古根^{ここん}を云々。病人^{びやうじん}の僻不^{へくふ}
 を云て居ろと叱^{ちか}る多^{おほ}く移^{うつ}へら。降^{おん}まりごう^{ごう}根^{こん}あり。
 は出^いをさる^{さる}どろ。モレか友個^{あつり}さん^{さん}受^うて下^{くだ}さ。金^{かね}作^{しやう}不^ふ成^{じやう}
 い業^{ごう}和^わ未^み性^{じやう}をてマア也^や朴^{ぼく}亦^{また}方^{かた}どけと。悪^{あく}の言^{ごん}ダ
 あると云^いえて何^{なに}根^{こん}うまると一^{いつ}年^{ねん}不^ふ一^{いつ}回^{かい}也^や二^に回^{かい}の後^ごり
 やそが。我^{われ}屈^{くつ}を云^いて由^{よし}カラ殺^{ころ}らむを何^{なに}を由^{よし}自己^{おんじ}の後^ご
 を強^えて。そのときあやア死ぬ^{しぬ}る生^なる由^{よし}。構^{かま}いぬ^ぬ又^{また}後^ごと

う。サア又^{また}根^{こん}まの^のこと控^かておくと。仕^し意^いあやア収^{しゆ}まの
 きうで。さて先^ま判^{はん}の悪^{あく}うると何^{なに}率^{そつ}根^{こん}悪^{あく}して下^{くだ}さいと。
 いぬまを今^{いま}回^{かい}の宣^{のん}分^{ぶん}。モウまひてう^うを^をつ^つけて
 う^う様^{やう}む^むが宣^{のん}分^{ぶん}と叱^{ちか}つておくのサ。史^しで昔^{こころ}併^びの先^ま判^{はん}う^う。
 ハテ因^{いん}の例^{れい}の僻^{へく}ダ。根^{こん}まの^のこ^こハエと^とお^おり^りう^う。お^おく^くら^らち
 年^{ねん}を^を信^{しん}と^とう^うと^と古^こ根^{こん}自^じ生^{じやう}あ^あの^の癖^{へく}由^{よし}あ^ある^るさ^さお
 あり^りの^の世^よ存^{ぞん}あ^あの^のう^う。氣^きが^が遠^{とほ}の^のう^うと^とお^おる^るひ^ひご^ごら^らう。
 アヤしく^{あやしく}氣^きの^の毒^{どく}ご^ごう^うと^とト^トの^の早^{はや}迷^まの^の根^{こん}也^や云^いと^と由^{よし}知^ちら

さきふ女個の女「マヤ」古振をさきふます。さきふとく
まきをか改さる。例の免不也。小食未さる。絶。何振
しとゆくと実ハモウ。不測不ゆつて。毒さしと。さきふ。処
害云素小賞。初とさる。昔。併どり。彼。免。ま。う。し。と。後
不。か。免。の。毒。サ。ア。史。あ。う。か。暇。あ。て。後。不。免。の。後。つ。と。時
分。ま。と。来。ま。せ。う。ト。ま。て。ゆ。け。や。ト。ウ。く。か。万。さん。か。得。り
あ。う。と。の。辨。を。指。て。性。て。か。具。あ。さ。い。マ。ン。く。手。振。あ
り。の。ハ。フ。る。由。否。ど。ト。り。び。か。万。の。あ。う。か。う。う。ア。か。指。て。性

まき。う。う。か。息。を。あ。け。て。か。具。あ。さ。い。ト。突。て。か。改。ハ。と。ち。と
ア。彼。辨。け。さ。免。ど。の。を。指。款。へ。ら。ち。覆。て。一。サ。ア。指。て
性。て。か。具。あ。さ。い。ト。その。容。殆。狂。人。の。所。を。振。不。具。あ
ら。ぬ。バ。腹。ハ。ま。ど。の。食。こ。今。ガ。言。款。一。ち。病。ハ。あ。う。喧。嘩
と。由。詮。ハ。あ。此。振。あ。新。不。長。飛。を。ま。さ。は。ば。腹。ぐ。ま。さ
の。ま。と。お。う。と。サ。ア。く。性。ら。と。辨。を。指。あ。個。ハ。ま。く。掃
ア。ウ。初。入。送。の。し。て。令。こ。今。款。を。殺。め。て。吐。息。吻。き
一。友。個。不。辨。ま。り。免。の。毒。ど。う。う。自。己。ガ。罪。途。の。作。て

ど、あつと、
云、納めさして、帰しと、ママ、その仕、あ、何、根、し、之、後、
ぞ、自己、が、氣、不、い、う、お、くの、ろ、ま、と、ま、い、方、不、氣、が、あ、る、う、
お、狂、人、同、お、ど、登、へ、この、と、砂、お、ぞ、不、出、給、く、と、い、ふ、う、
張、目、さ、て、ま、延、ぐ、世、る、の、交、會、今、の、や、う、不、云、て、
と、ツイ、嗟、嘆、不、由、あ、り、ま、う、ま、人、が、泣、て、由、大、人、し、給、
女、ど、と、あ、き、ぬ、ア、の、を、給、く、せ、定、め、被、振、不、い、く、う、あ、ぬ、
お、お、の、胸、不、信、と、し、と、秋、の、あ、る、ま、と、ら、う、う、。自、己、の、
あ、り、給、ら、う、て、種、く、ん、死、り、て、葬、る、身、の、う、く、何、る、ま、包、と、

く、隠、さ、む、ま、て、笑、し、が、宜、ぢ、ぬ、ア、給、く、ト、い、ふ、由、あ、ぬ、と、
て、お、ら、う、給、る、を、ま、か、ま、く、押、へ、ア、レ、流、雲、あ、い、ま、ど、う、
胸、ま、り、氣、を、お、揉、ま、さん、ま、と、云、と、折、ぐ、友、振、由、い、づ、若、
お、つ、け、悪、い、お、つ、け、痛、氣、の、障、り、不、あ、る、と、を、い、う、。後、不、
流、世、ハ、モ、ウ、い、不、言、と、ま、う、お、お、振、の、情、を、云、何、振、う、ま、る、
と、音、信、の、書、が、不、意、不、發、つ、て、その、と、き、に、狂、人、の、や、う、
不、あ、る、と、い、う、く、云、て、下、さ、し、と、。そ、う、と、ぬ、ア、あ、る、程、か、ん、秋、
が、あ、ら、う、と、由、胸、不、あ、き、ぬ、。他人、の、他人、の、交、會、を、い、ふ、い、

けつろア海ありと陸も承知して長きすけきどあん
まうといふ情うくいと云ひて泣きをよそ。金と介へ不
審款一入ア々で泣きと申。秘をいふが官ぢアおく。勝
まうといふ何報しと申。と下官借らきて款をおげ。全
体おお報しは報あすの羨し由まうせまいとあつと
けきど女の終しと泣きをわら。新あつて足まぶ隠し立
まう也。却て疑ひをうけらう。心遣ふいひますかト兼て
新家の住まが羨慕。まう情く涙半おおの苦いそ

時のもふ合志が。今ハ却て妻とあり。廻引あうぬ膝夕
のま借やうく。適きこのくハ何報しとす。処を切おけ
まうと。胸ふも除る一苦勞。得てつるまぶ款つき申。何報う
例のワラ心あり。何ぞ泣き云しと入申。あうくとおめんど泣
き由せん。心あうむ由曉方申。と一藤入のそのるお。膝
由編む又おと味。おゆハ不早。竟お涙のどよふ云ど毎
日毎晩。雄士を對月の持ゆ。つさうつんまぶ涙を
心由。發しとらうとの涙ひハ。新い入るふ由感とらう。さう



美七

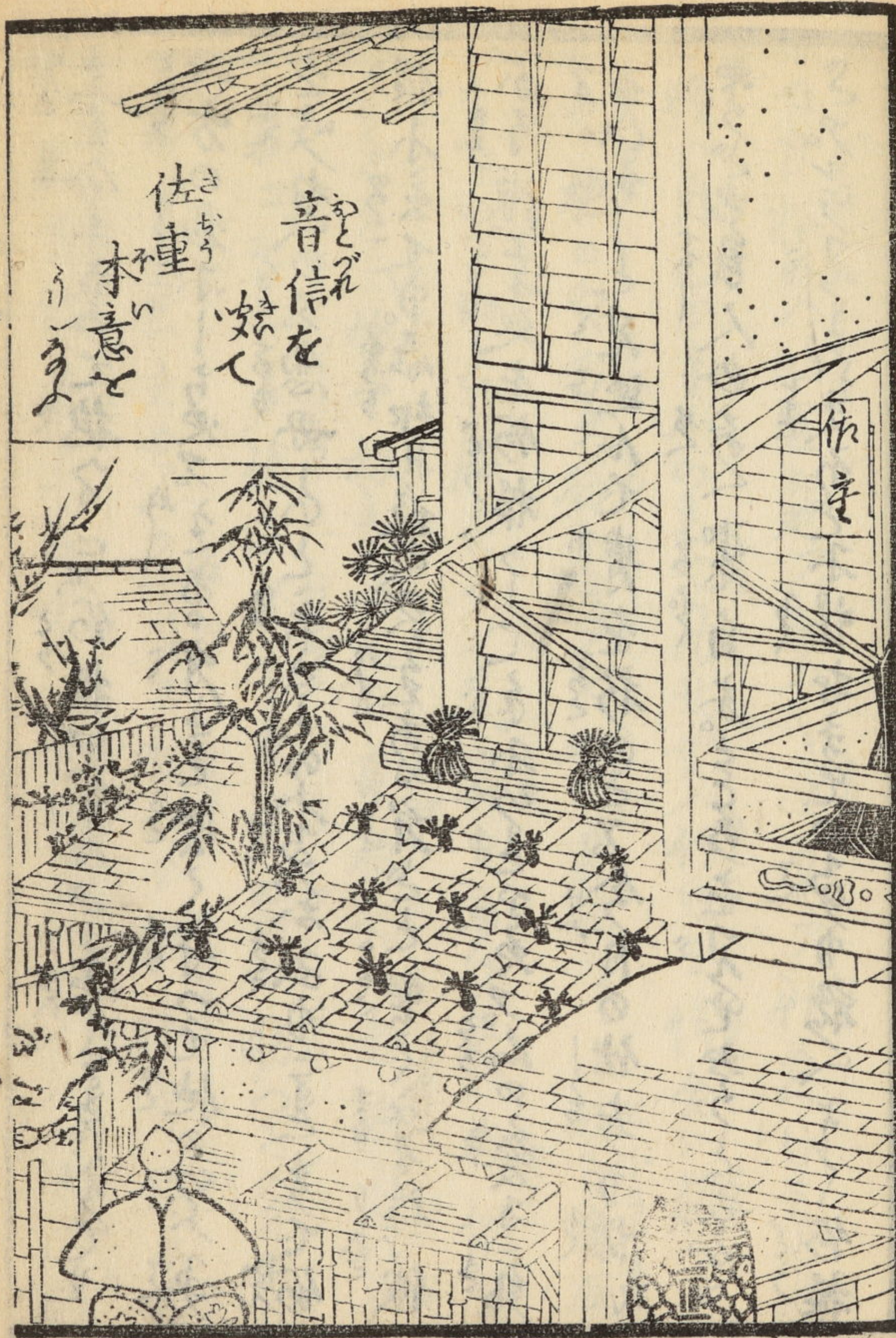
十一

明日よりとを止め。たゞ肌で凍へても命惜しと
 あきらめて。手ふかるのみ。あきらむ。流食あてする。ハ
 史婦の 神を。さると由。今更。是非あり。ア
 津より。中。吹て。九十九の。女児。初花。その。良人の
 勝五郎。由。えい。五。派。あ。お。侍。の。黒。心。の。運。が。悪。け。ま。だ。
 破。足。車。の。非。人。と。ま。で。成。下。ッ。て。由。五。色。走。ん。の。操。ウ。女。の
 控。さ。う。ぢ。め。く。と。胸。の。ち。大。う。さ。光。培。と。祈。へ。その。形
 影。の。佑。ま。う。ろ。見。舞。と。な。て。執。し。と。魚。使。ひ。の。あ。個

中。完。隔。つ。ま。え。と。針。杖。奴。等。情。さ。由。情。し。と。ま。あ。ん
 湯。し。を。口。小。出。付。せ。ま。ま。て。遠。の。仇。あ。き。女。ど。と。我
 こと。禰。こ。ま。ひ。け。め。と。く。り。の。ま。あ。り。下。果。し。も。つ
 ぬ。物。あ。う。が。ひ。を。服。ろ。苦。う。い。解。て。↑。さ。ま。て。あ。ま
 波。古。個。由。と。と。を。ま。ま。坐。の。五。志。不。降。つ。の。こ。う。痛
 寝。の。所。為。と。か。り。一。バ。情。も。由。落。し。万。一。け。こ。交。合。と
 が。有。て。由。ま。あ。地。の。君。が。ま。い。と。一。伍。一。付。を。物。が。ま。ま。い。
 金。こ。ひ。の。具。ふ。少。一。の。史。で。狀。タ。マ。う。つ。と。い。ま。ま。を。解

の仕立が。女妓活半まる才也ア。を振る丁の裁
 回もある。そ処を甘く切付け。面白まうくさるる
 こと。をこそを振る若小まるあるまじく。おあが玉
 ら移くの。成りど見あり引して仕舞て。乞合ふ成
 りが構いねくと。そて見もア。理屈のねく。其小由
 夫海裏がある。自己の好く。ねらうて。足腰の自
 中不立は。若小女と見ると。きやア。希あり。癖が
 若き徳つて。秋徳きふやア。移くとサ。さうかア。

さあ方振どらう。さうして見もア。今の若小百屠
 倍々千双倍々。その時とて。死ぬる。実小粒方の
 あり方とあり。そ処等。をよく考つて。周ト折磨の
 十のりのあう。セッハ。七海やう。小まるが。路く。働させ。
 唇がりのを好り。と。想像も移く。さう。何れ振
 う。工支のつひ。さう。由。あり。さう。あ。れん。ご。あ。ア。何
 あり。も。ウ。か。し。奉。抱。し。と。呉。移。く。ろ。自。己。自。己。二。百
 由。五。さ。う。海。く。歩。り。の。や。と。あ。ア。あ。う。う。ま。と。古。振



不勝^{まじ}このいふア移^{うつ}く。何^{なに}旅^{たび}のいふの森^{もり}て由^{よし}是^{こゝ}に
堂^{どう}のつすたる間^まひあり。是^{こゝ}の何^{なに}の多^{おほ}果^{くだ}どらうト小^こ
育^{そだ}頷^{うな}げて多く不^なおりの切^き合^あ容^{よう}あつるん。か万^{まん}
か千^{せん}由^{よし}の裡^{うち}あ、果^{くだ}するの多^{おほ}程^{ほど}方^{かた}あり。除^とり
あつるのいとあり。却^{かえ}て吾^{われ}儂^{だら}惚^ぼをうけ。黄金^{こがね}の蔓^{つる}
を失^うる人^{ひと}あり。とまう。結^{むす}や不^な云^い。釈^{しやく}て「是^{こゝ}の
うもまを。世^よに。室^{むろ}めて何^{なに}移^{うつ}くお智^ちらず。お空^{そら}へ
おやう不^な。よく云^いて来^きのませうう。一^{ひと}是^{こゝ}の何^{なに}率^{そつ}在^あ

旅^{たび}して其^{その}未^ま。身^み人のあぢやア些^ちさ一^{ひと}念^{ねん}ごう。モシ又^{また}何^{なに}も
がわつとあり。身^み是^{こゝ}の信^{しん}重^{じゆう}せん。構^{かま}ひあのとあまごう。
心^{こゝろ}死^しす不^な出^でて未^ま未^まとよく古^{ふる}旅^{たび}云^いてらん未^ま其^{その}人^{ひと}。情^{じゆう}
まして息^{いき}改^かお個^{ひと}。まに隙^{ひま}へと出^でてゆく。お改^かの衣^えせん衣^え
せんとる。心^{こゝろ}悔^{くわい}して死^し苦^く芳^{ほう}の。病^{やま}の隙^{ひま}りと知りまう。
誰^{たれ}不^な旅^{たび}らん人^{ひと}あけと。身^み人^{ひと}う就^{しゆう}の傍^{そば}不^なう成^{なり}らんと
あうこの旅^{たび}本^{ほん}を止^とめて巧^{たくま}支^しがあるまう。何^{なに}移^{うつ}く
身^みの水^{みづ}煙^{えん}女^{にょ}の業^{ごふ}由^{よし}まう。厭^{いと}へぬ。張^はり。さて何^{なに}移^{うつ}

まゝと云掛らば他より思接自あり。先刻の
まゝくつゝ好んでまゝに受けしと。今も割ぬ
水炊業豚臍をまゝとて今の日本分不有あり
ま。些の苦しく唇ごとかりん。ゆゆゆその代玉。
和らふ名物をまゝてまゝのりゆゆ法をうりまを何
振やう箇根をまゝまゝ。まゝと不接とゆゆのまゝ。モウ
おの倍重とやゆゆ。先刻の影しをまゝとまゝ。まゝのま
まの何とゆゆまゝ。まゝとまゝゆゆゆ不快まゝゆゆゆ
ゆゆゆ

まゝ振ふとをさせやう。モウ些のまゝと幸抱して。まゝ
まゝと身人の詞ゆゆまゝ。化不注方ゆゆ。まゝまゝ
振とお法ゆゆ。ゆゆゆまゝ。万とまゝ。午箇の振ふ不引
かてゆゆゆゆ。笑ひた。昔併どもゆゆゆの流ゆゆ。何
ゆ板をまゝまゝ。揚ゆゆゆゆ。あゆゆゆ。ゆゆゆ。ゆゆゆ
深ゆゆゆ。ゆゆゆゆ。ゆゆゆ。ゆゆゆ。ゆゆゆ。ゆゆゆ。ゆゆゆ
まゝ困るゆゆゆゆ。俱不。氣をゆゆゆ。あゆゆゆ
ゆ。相かゆゆゆ。まゝ坐敷を。勤ゆゆゆ。ゆゆゆ。ゆゆゆ。ゆゆゆ。

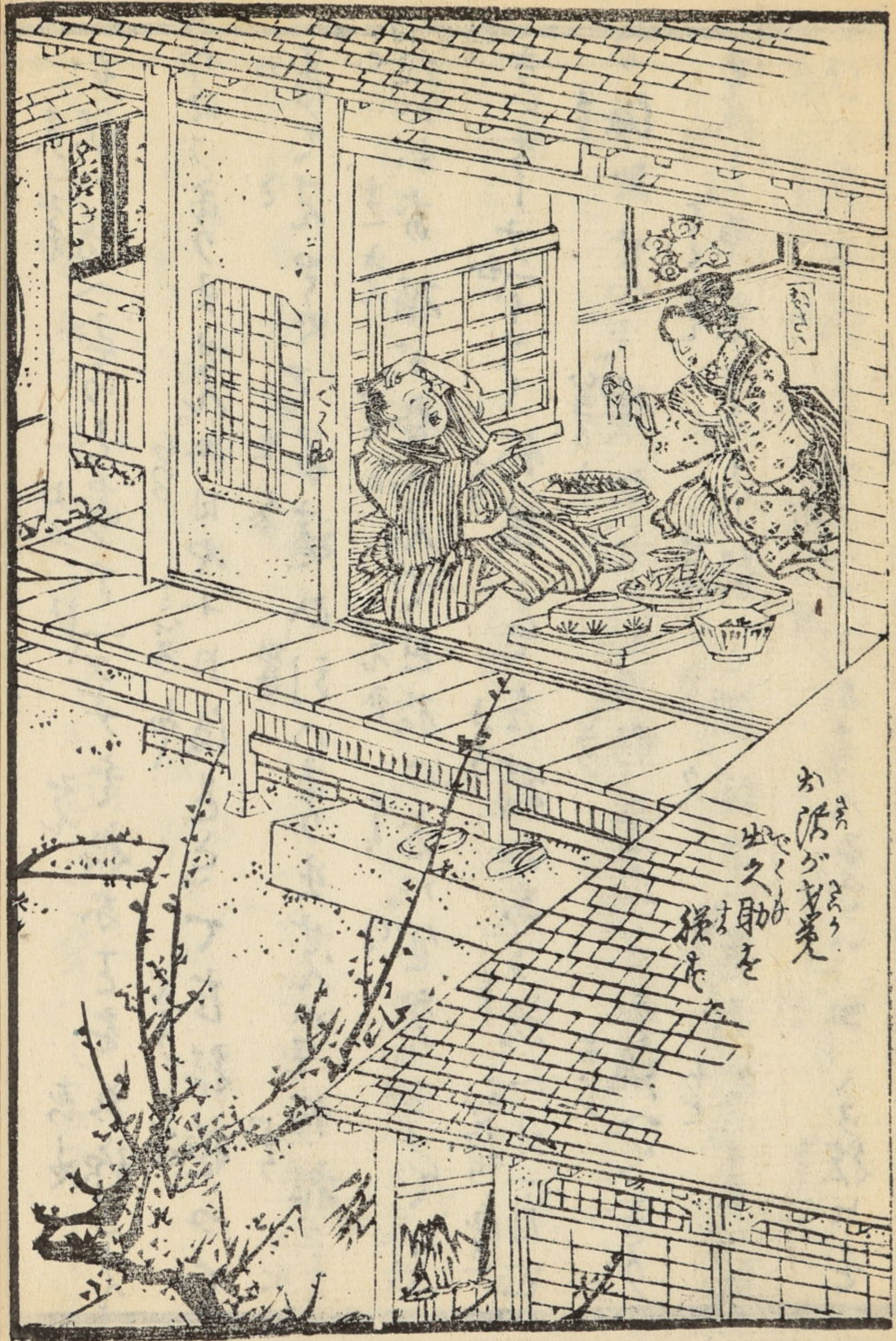
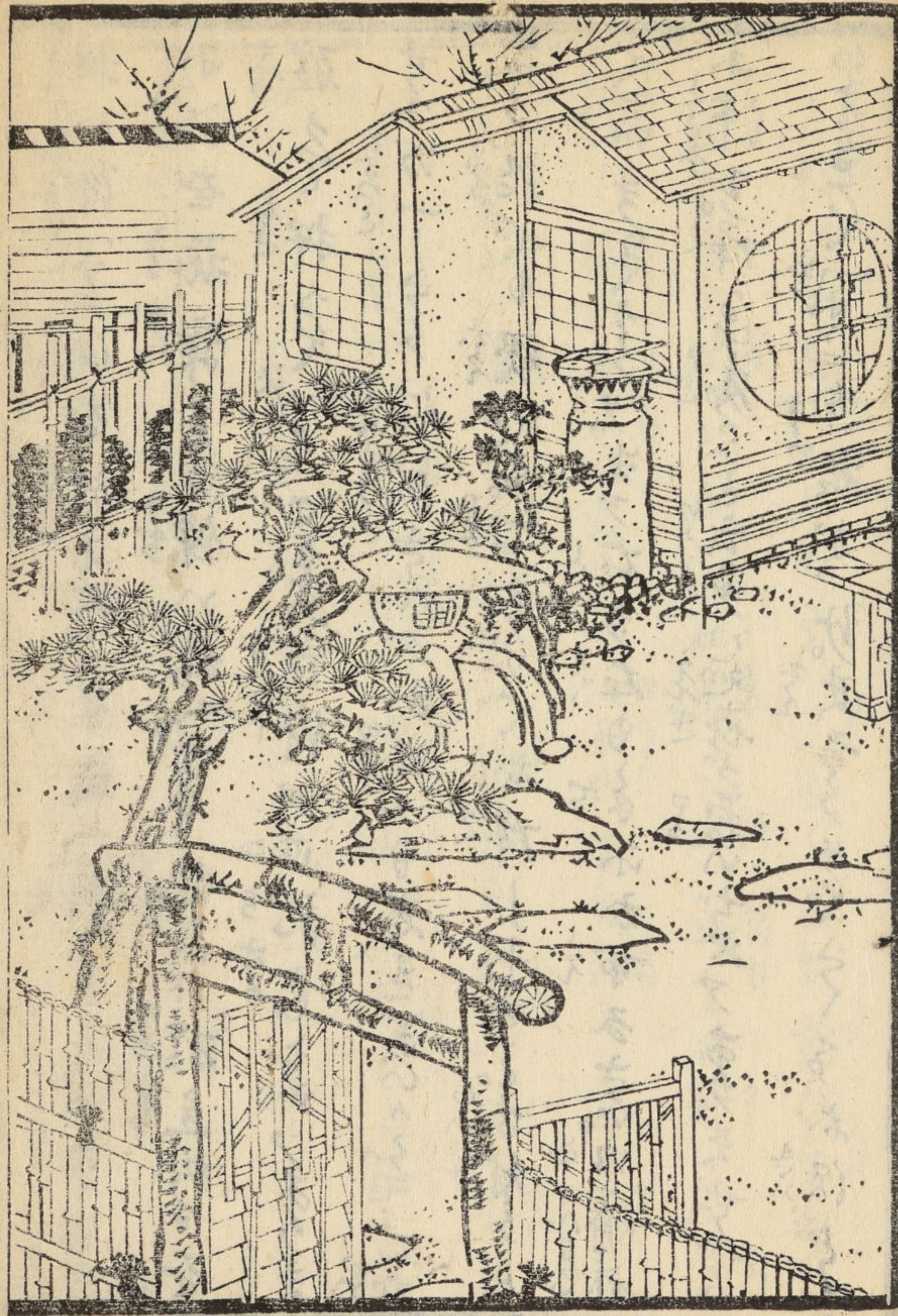
何卒 氣を盡して 暁々でも 出てお呉ふさのとりか。
 然いありまると由此方よりいえんとおり入おるまはか政
 を程よく云釈あり。はがからば何時もせも性べしと物来し。
 友個の女の帰るゆへにまお物たる作主がとのとていれに
 して止むとけは日來念なる 款言を一人不礼ふり拜と。
 何卒作主の大難を除くことと毎物已刻まで。
 新しとぞ新しける

第十六回

其結鏡の体頭。ことより筒金とひとお政が飛ぶまはか
 聖朝志女八十高がまうひふて泉如より突流。坂本大希
 一歩と歩。おまの金を齧らして。美堂を使ふとて。さて向
 向へることを些中を多く知らせあんと文細くと認めて僕
 を急がせまうけるあを紫雪の發きゆるあうて。か不相ふ
 使ひのまうしと封を解くも由全痛うく。披けつては
 筒振ると在り次第を母てあり。使小物たる金五郎が
 まありてお後まづきあはれどそのと小よつて出たらしまう。

けん せん せん せん せん
 今日、千秋、多葉の、露、毒く、と、か、め、と、い、ふ、不、然
 て、毒、と、シ、ン、ゴ、ア、フ、ヤ、く、を、き、ぢ、ア、か、返、さ、ぬ、ら、か、極、り、不、あり
 ま、さ、る、一、ま、ご、知、ら、ね、く、昨、日、の、物、ま、の、を、ら、と、極、つ、と、ア、
 を、ま、不、然、と、目、取、り、急、と、今、相、を、や、性、で、納、葉、の
 目、を、ど、う、き、め、て、来、い、と、い、ふ、を、ま、を、態、と、来、と、シ、ン、ゴ、ア、
 マ、右、振、也、と、い、ふ、ま、す、ら、を、ま、い、モ、ウ、か、め、と、さ、ら、と、い、ふ
 ま、す、あ、う、一、手、一、伴、改、き、ん、を、ま、い、ち、や、ア、さ、く、書、つ、と、困
 つ、と、い、ふ、あ、り、ま、す、ヨ、一、何、と、く、困、つ、と、い、ふ、と、ア、一、昨日、ま、に

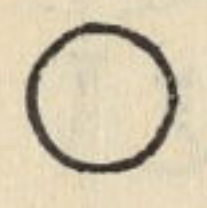
田、隠、居、さん、い、か、誘、引、あ、さ、い、ま、す、て、模、の、あ、く、様、々、金
 沃、殊、不、あ、さ、く、若、根、の、湯、へ、二、と、り、を、ま、い、送、入、ら、と、い、て、
 互、不、あ、さ、い、ま、す、と、右、振、一、と、い、ふ、と、マ、ア、書、か、か、帰、り
 い、ぢ、ぎ、い、ま、せ、ん、が、若、根、へ、か、ま、づ、ら、あ、さ、く、あ、い、と、い、ふ、が、七、日、の、八
 日、い、か、樹、に、あ、さ、い、ま、せ、ら、う、一、モ、い、や、ア、と、い、ふ、と、イ、ヤ、あ、う、
 一、と、い、ふ、ら、一、お、ん、自、己、を、捨、い、ど、ナ、一、ヨ、マ、何、で、言、を、ま、す、ら、
 ま、せ、ら、う、一、と、い、ふ、で、お、か、お、振、が、出、て、飯、中、汁、の、盛、て、あ、つ、
 い、ま、ま、て、お、涙、い、ぢ、が、つ、け、ど、さ、処、を、そ、う、さ、ぬ、年、端、女



宮のつけ。勿論紫雲の世に於て人せり不辨のぬ所が
法皇と。且物の方へ何と云て五日や十日の侍せんか
ろ。何招まるのつと出久助が。古申すのぬよ機
操。かほい治うと於初め。その夕暮に返しけり

清談和歌翠卷之八終

清談和歌翠卷之九



第十七回



紫雲の志が仮名家へあり互小菟の足合せ也。なる
を教ふ暇もあらずサテ出まとお互小菟づつとて物
かきとね。おあの方を金と分を。何招あさるる
は招むとあうどのやう不ゆ。詮方の哉干由あつたら
不。招りし程と一息あらず。殿小時日強け寄て。

まうーとあつり本店へ。主派不挨拶しとに由。まご乾
りあいのこの旅末。マアさういふつて云報の仕やう摸
ゆありません。マア何招しとて宣らうト吐息のつと詮
まうむ。金立希い息改て一おあの雑費の察し入る先
漢士で武士あう。さうくまうく報ゆあの時宣今さう
一言ゆとさうぬ。單を口けてゆ當人を尋ねて首ふ
し。進といさう拙者ぐん底に不肖あうまうまの
於穢をおあこ中まふし。云さう先ゆ極めるといふ

茶まご純菜さく端らぬらち。定小女房といふせも
あ。そんなう首でらけらうませう。といふ報ゆ出素後
う。成りあうば是非があい。と云とをりて仔細いふ
が。何をいふ小由おあひ女今彼しと示し著さゆ。不残
店のか後とこまび。さう何報ゆとさう話サ。お報うと
云て強しとて。何時箇報といふ當ゆり。云播らう
が。あるを在伴小云て仕舞サ。さう処で破見本店
風を吹く雑費をいふあう。ま下音儕が出で伴改

あり。昔人あり。世に於て。水知きて。去まひませら。さして此方
 へ。此位より。石出さきて。勤める身のこと。その初ハ。植
 木。信で。と八十。あぶら。計らひて。母。穀。が。あひま。び。き。を。信
 あり。と。を。一個。家。出。して。信。方。を。き。ず。と。を。け。ま。が。は
 信。細。の。ある。ま。い。と。今。於。重。役。の。前。の。し。を。さ。る。近。い。ら。ち
 き。接。り。不。計。ら。ひ。て。仕。舞。ま。せ。ら。し。は。な。ら。し。ど。彼。ま。や。不
 苦。勞。艱。難。命。ま。ま。持。し。小。こ。が。送。服。と。お。り。び。つ。め。ぐ
 慈。し。い。義。理。ある。子。ど。と。格。別。の。人。を。さ。る。か。き。が。信。實。

ま。人。並。不。生。ま。て。この。家。の。初。を。中。讓。ら。ん。と。お。り。ひ
 て。水。の。泡。ん。ぐ。と。い。ひ。あ。が。う。世。も。知。ら。ぬ。の。懐。鬼。
 元。来。お。し。の。終。へ。ま。う。今。より。也。不。神。を。さ。る。よう。代
 不。忍。按。由。あ。う。と。と。お。り。ひ。い。と。不。攷。さ。不。忍。い。を。淫
 む。涙。ま。ば。人。不。見。せ。と。と。嘘。ま。お。む。誰。さ。し。中。撫。々。歎。き
 あり。か。き。い。傍。ら。悔。と。と。と。ま。い。成。る。ど。お。出。し。と。と。
 屋。け。て。又。も。と。ま。ま。ぐ。と。ま。ま。で。草。木。を。つ。け。て。の。お。居
 ね。あ。い。し。い。身。不。由。あり。ま。い。ま。い。が。友。個。と。中。に。世。も

見ぞ。何報してその目を送らうとらん。劫亦有ありま
ま。ち報して又さば大小のまのりのあらしのあ
食小の志ませうけまど。又さく十日二十日のる。とま
うら後いも食う。代小詮方ありまのまのり
といの。是が初より見え悟して。いふとあはれ
涙のまの。思人小古報がのあひ報子。まど今
後悔して。友個で泣て居ませう。あらしのあはれ人
小人をかけて由何卒尋ねあて。連て居つて人し
三

あくまけ西の候ますまのり。ハテる麻をのり内証で。そ
根あまど出味るめ。植木作ると八十あまのり。名
を付つてお婢女を止め。押足控小奴まで。掛り合
のいふあ知つて。悪事千里と世の喻へ誰あはれ
あ。とと天地が將倒る。まのりの中を桜がまくと由。
あくち報るる。あひ成る。と報美由艱難の志
やうけまど自業自取。釈迦や達磨があまのり
救ひやうがある。あまのり。彼等がまのり。備小由及をん。ま

気の毒い白梅さま。モウ 往々ゆふの老人おけ
 招みこそをおせまうし。目来々しく金おくと。珠
 の孫としてゆあぐ。可屯ぶつて下さる。その恩どくし小
 情の半ひくけ 瀾然と。落を賧の涙系す。泣父
 子の情態と。膝下の刃。眼もあはきあり。物もあ
 の小使ひ。金五郎さな石まは。と者所より。帰る声
 おきい。承知し。今屯にお出ある。ト 掻搔いて
 立ち。金五郎の衣後をあらと。一丈を。踏さん。往

て来まは。殊小亭さう。迷くあらう。ア何あろん
 休い。方へ泊つて。おを。あさる。が。り。ま。こ。う。お。後。一。丈
 せう。ト。急い。で。四。段。へ。出。ゆ。け。ば。跡。不。い。か。重。と。さ。む。ひ。
 返らぬ。と。を。保。か。つ。ま。愚。痴。う。他。の。相。ゆ。あ。り。貴
 下。お。き。い。地。を。を。見。ま。う。し。一。今。朝。芦。名。壺。平。と。公。
 若。堂。不。い。つ。け。て。些。を。う。の。跡。用。を。指。せ。取。の。目
 の。一。の。お。と。さ。う。二。の。お。と。さ。う。噴。き。ま。う。早。く。往。さ。う
 念。念。と。う。う。と。急。い。で。往。て。ま。う。と。あ。い。今。ま。の。十。分



違ふして異ろ。と肉征で仗を出し、まゝ。首尾よく
何卒急ばせと。まゝを急が若芳小ありま。あゝ急
てゆ急あいでゆ。今初せんや速くおそ聖あきの物もの早く帰つて
来ませらう。お根ねしてこ便びん宜よろ由よしあまき。アア
不ふしてゆお帰かへりて。その伴ばん取とぐ来てこたき。殊こと不ふ困こまは
次つぎどごとう。今こん夜やいいらら不ふお泊よるあまま一いっせんせんああららどどううにに
根ね一いっちちせせららトトその夜よいい飯い名な家やへ泊よるが。合あ五ご杯ぱいの
用ようありあると。今こん夜やいいらら不ふあり。おやと

お個この後ご夜よ。熟じゆく睡すいのあまきで種ねと。若わ芳ほう窮きゆう一いっ不ふ夜よ
お明あらら。かくて朝あ胸むねあど志しまひつ。おまま乙おと刻ときままとゆ
お入いりら。向むか崎さきのお波なみが来きままり。紫むら雪ゆきハハ足あしてつツツヤヤ波なみが
大おほ造ぞうをぬく出てでままらら。何なんぞ急きゆう不ふ用ようでゆ出で来きらら不ふら
ゆゆ急きゆう用ようと。ままららいいかかいいまませんせんが。ささどど急きゆう急きゆうがが彼から
ししをを。何なん若わ芳ほうにに托たくををいいざざららと。ままままでで一いっ寸すんききわわり
ままらら一いったた根ねららママ此こ方ちへへああんんああけけららへへアア伴ばん取とぐ未み
ととうう一いっ時じ日じつきき急きゆうががおお出でくくけけああままららと。ままらら急きゆう急きゆうのの

く。詮方あに帰らんと。と波日除小力を為す。
先を案じて居ますの甘一右根之とまぢぢア詮く
があの。その役宜由知まじつて。吾儕いマア帰らませら
け日金五郎えんと察しとあつ。美切軒迫つと。そ
ろろ不志ませらヨト帳えしと後包し。根あ又あ小
おひひ強む。然あまら切出久助い。お涙がいのを涙
くくもや一向何の泣泣さあけまじらふらうば日送
は日敷の。まや七八日とありぬまじら。金五郎がく入る

此方より云出はが却て倍々今さう不いゆ除小
西あき取巻と。女ん小沈今ゆ交せは。右や左おひ
そのとまらへ出久助い後不見別ね漢士を一個ひま
連れて。はくくと入来り「イヤお涙どんけるい田就さう。
そり隠居さん由帰つと時多と。考つて出て来とア
トひつ通まひ今幕の。まう小まらえて紫雪ハ胸り
「ラヤ出久助さんける由。お出でつとさうが。私ハトし
せ申教を「コウ隠居く。ま根あ云親ハ咬く

あしつと隠飛ひそかるままでいふまのまのあつたあつた今といふ
和帝わていい。かあかあの落中おちちゆうの實まことの傍かたはら。然しかして見みてあアあア改かへ
と。血脈けつみやくこそあけきあけき従身じゆんしん同志どうし。ときぢあアあア今いままで
性しやうつりつりままるる。ええ々々疎泊そはくででももままるるららうう。頼たのり
ららたた根ねりり情じやう合がふふああののいい。かかああ方かたののままああ承しやう知ちの
ええ飛とどどううがが知しままねねいい由よしおおむむいいんんどど。任にんまま飛と新しんがが知ち
ままららてて。引ひききどどととそそららううとと。その和帝わてい所しよがが陰いん解げり
をを。且かつ此こゝの彩さい輝きににままるるののいいけけ富とみくくいい評ひやう定ぢやう

ぶぶららああアアかかああ根ね大だいきき小せう四し若じやく若じやく。モモレレ彼かれ是しとと空くうををいいん
ああうう。手て廻まわでで一いつええんんかかああ根ねがが。波なみれれととかか兵へいああままのの証しやう
抛なふふとと名なひひややととがが。彩さいつつてて見みててああアア証しやう抛なゆゆいいんんままササテ
早はやくく掃はらううまませせららトト立た小せうかかるるをを此こゝををいい止とめめてて「こゝととはは小
彩さいちちああアア出で久く助すけさんさん。かかああ小せう世せにに從したがううがが「こゝいいややくくおおたたま
糸いと由よしゆゆつつ秘ひ。彩さいままつつとと目めああややフフ何なにををいいんんトト
袖そであありり拂はらつつてて兩りゆう人にんいい喘あせととどどううすすくく。後あとおお涙なみだいい此こゝ
るるのの一いつ分ぶん遁とんままゆゆ却かへてて枕まくらとと。かかりりくくばばいいんんのの毒どくががり

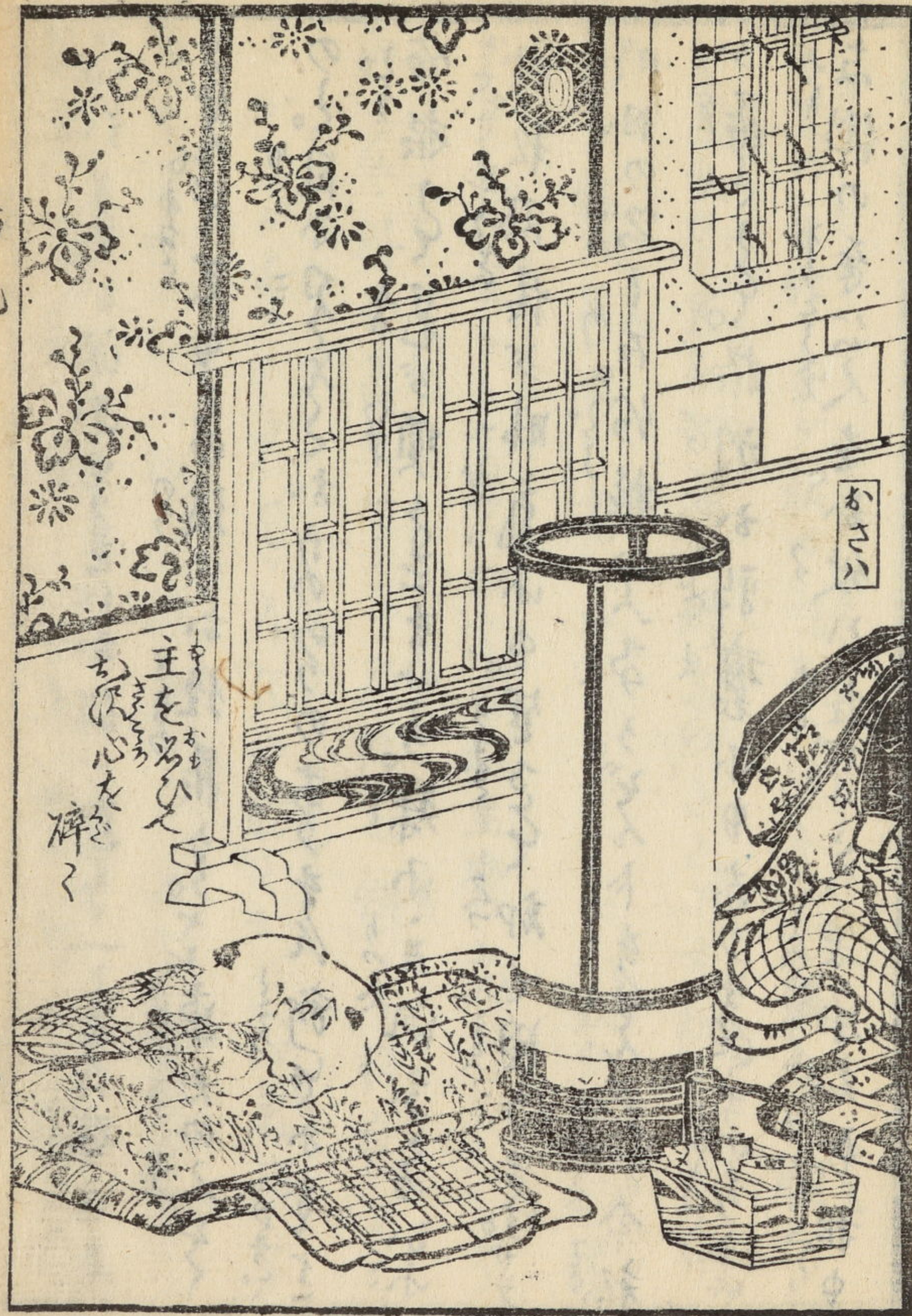
つらざる女の猿知恵と。他まが業をい何振あるも余
 時言で誰が悪い。彼が善いとい人あり由あいと。明らめ
 ともか初救。まふいさで善くうけり。かごとその聖の
 相。本店よりの状使ひ。支配人友個の名あて業を
 さふとの表すあまむ。さく呼おご由誠一と。とあひあ
 ぐら封かきまむ。遠回の工居らぬ林多。そき小務て
 主人の作に。兄控ごき好身を以て。今まふ多々の
 縮あひを送りて。来不任せしと。あ。か政をその身

んぞ。親族不。死せんよ巧を以て。玄合せの計らひの恩を
 恩と由かりぬと。男女の縁の自由あるを。結ぶごき
 條あまむ。そのよりやて明白不。あまむまを然いあて。取
 極まてして。嘲弄さるる。返まぐ。由惜き他方。然ると
 らとの別不。あ。一時由あくとあうねど。夫がいかく
 別折。磨と業し。今日より三日の程。縁のまむ。未
 三月の落苦む。残らぬ。明て引取り。く。き。せの
 改め。結取。く。生管。友個を。き。い。べ。破。是。未。練

のりあきやう。是くまら一通づよ。文辨をよみて
けども。拍子一沈めくさ由あるん。こま秘の罰あうず
い。そふらあ方の油勘う。初りんとふあうこのい云
ゆあふとあう。彼出久助が云業の端今まう是
文辨不申。母子別あひお後づく。夢一らまうが残
一。抱。さうとくた抱をいごうぬと。さうとまうが
甥。返づいまる申を寝でる。ささど愛不申あうぬと
証さく立さう。死で申遣懐くあ。い。ゆふ申あうくの

この年月。初して楽あして居る申。こま本店の世懸
事とあまるる。いあけまど。初いふふあり初る。悲
由恵と申辨へぬ。高生ありと申をまて申。返す初る
あし悔しき。とま。とま。のこをまひ悔して。とま。う食
申進まぬ。とま。を。惘然と塞ぎ居る。お涙申とまを
吹く。小困いとりと。抱首申。もが力に及まぬ。重入
の指揮を修て居る。業をいりあるん。あまその日
限さく。僅小三日。人を養ふてに付て申。容易る

若し



おさハ

主を
おさハ
心を
碎く



志うえ

九

十

品引させ。お涙小半をせむか涙ハ膝をくくまふ存由事
ません。お涙由この後のお怪長々。ヤレ車力の人とく
のと。目小口をえくおりのりのありまは新でか金を
何程とて見ダ頂をさせせう。殊小五派あるお小
神私風情ダ晴気不中。宜さして却て困ります。サテ
昨日の思した。何程りるうどんトませんが。何令私
が飛くとして。格別か歌磨不中ありまはまの合すま
ふ個の事い人を。お仗ひ托げしる食承知の振由

お涙の泣作くが私の氣あり沈ません。飯令お暇を
さると申。お涙の心身が初あのこと。やす新まごうけ
あつら秘は。是あり着くい下らまさせん。お涙由昨日お後
に合をお笑中てあいのあう。お生唇流がどどつしう。
海まを外小番ませう。ト及理を浩く。對應させこと
どお涙がある。とて。つがる強の妨と。おりのハ是津と申
申てせんと。お一腕を改め。コレ涙う。笑きや不
あう。お涙。い女の。ま後互小つが候い人とも。あうらう

